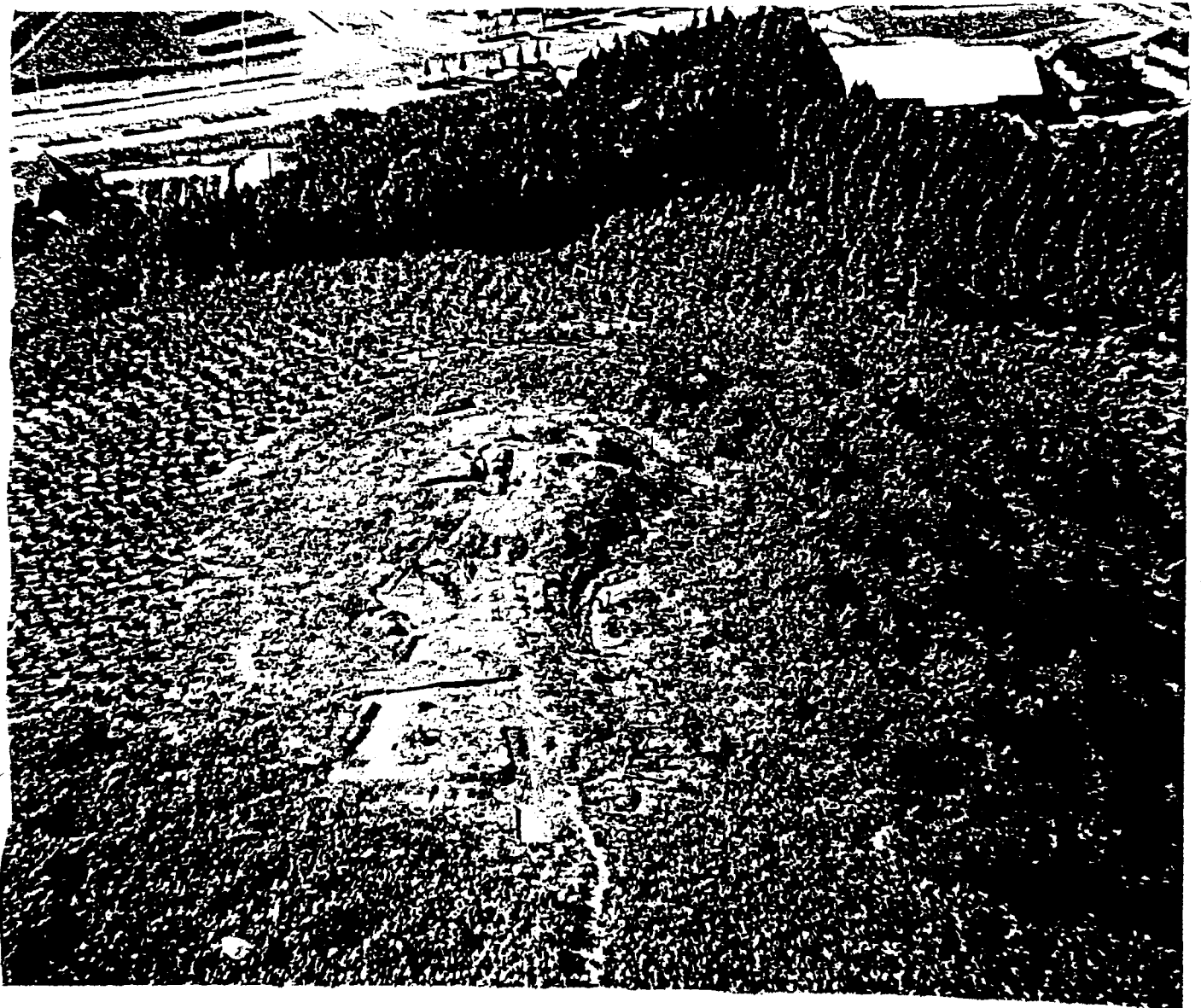


**秋の古墳めぐり**

**備北の古墳をめぐる-東城町・西城町を中心に-**



**主催 備陽史探訪の会**

**講師 古墳研究部会 報11年11月14日(日)**

本日のスケジュール

福山駅北口	8:00
南山古墳	9:15
上下	9:45
庄原	10:30
西城	11:00
昼食	
東城	13:30
大迫山古墳	15:00
辰ノ口古墳	16:30
福山駅北口	17:30

スケジュール変更などにより時間変更があります。

バスを降りるときは集合時間を確かめてください。

・犬塚第一号古墳（東城町大字新免字神田谷犬塚山） 広島県史跡

…径約 11m・高さ約 3mの円墳

内部主体—南南西に開口する片袖式横穴式石室（全長 3.7m、玄室長 2.3m、幅 1.9m、高さ 1.5m）

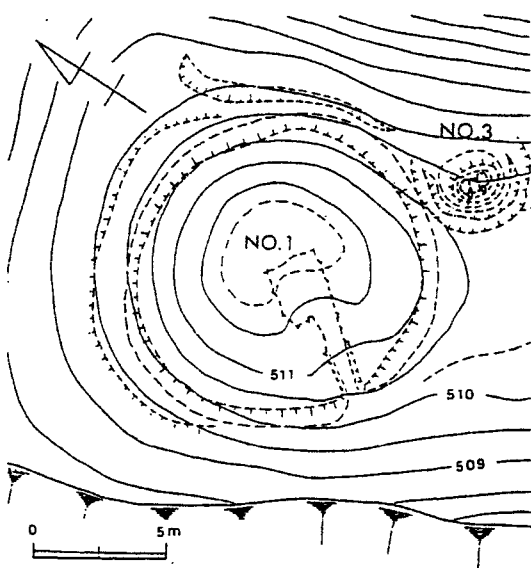
石室規模は全体的に小振りだが正方形に近い平面の玄室、大きく張り出した片袖部や狭く短い羨道、一部に小口積みをなし持ち送りの著しい壁面→古式の横穴式石室の特徴

出土遺物—玉類（勾玉、管玉、切子玉、小玉）、金銅製品（耳環、指輪）

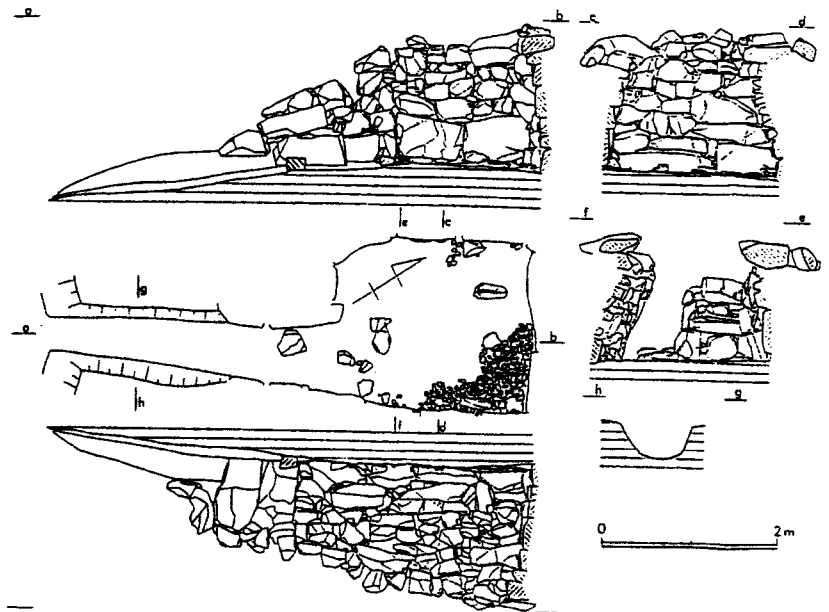
鉄製品（剣、鏃、刀子、留金具、やりがんな等）、須恵器類

副葬品の出土状況から約 4 回にわたる埋葬が推定される

⇒備後北部で最初に築造された横穴式石室墳、六世紀前半から中葉



犬塚第一号古墳墳丘測量図



犬塚第一号古墳石室測量図

・その他の前方後円墳

太室古墳（東城町大字久代字太室）

…全長 24m、後円部径 13m、高さ 3m

埋葬施設は不明。葺石有り

平野から見える面は丁寧、反対側はほとんど整形せず

牛川古墳（東城町大字戸宇字牛川）

…全長 21m、後円部径 14m、高さ 2.5m

埋葬施設（後円部・横穴式石室、前方部・箱式石棺か）

葺石は観察できない

□比婆郡西城町

…中国山地とはいえ、西城川及びその支流には相当の平野や盆地が広がっており、また、西城川流域の平野は庄原、三次地方と直結しているのも山地といった感じはうすく、以前は八鳥の谷から山陰に抜けていたという。

☆横穴墓

…「横穴墓の大半は、これら群集墳と時期を同じくして形成されたもので、一般的には墳丘を有さないものであり、丘陵の斜面ないしは断崖に墓室を掘削するもので、群集を常とする。」(池上悟「横穴墓の被葬者と性格論」『論争学説日本の考古学5古墳時代』)

・穴居論争

…「穴居人民ハ土蜘蛛……」

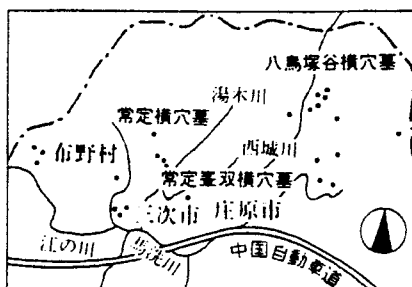
…坪井正五郎「穴居説」-吉見百穴

…明治三十年代一墳墓として掘削されたものであることが明確になる

・全国で三〜四万基といわれ、「北九州・山陰・北陸・東海・関東・東北地方を主要な分布地域として掘削された群集形態をとる墳墓であり、横穴墓の研究を抜きにしては後期古墳時代の理解はできず、高塚古墳と同様にその価値を正當に評価する必要がある。」(同上)

○広島県の横穴墓

- ・比婆郡を中心に、およそ六十基あまり存在。
- ・西城町には十七〜二十基(現存は半数)
- ・八鳥塚谷の六基並列は知られていない



○八鳥塚谷横穴墓群(西城町大字八鳥字塚谷)

…東から西に延びる丘陵先端部の南斜面に、東西40mの範囲に六基の横穴墓が南に開口しほぼ並行して分布している。

一九五二(昭和二七)年に豊元国氏が西城町の古墳調査を行い、この時本横穴群も一部実測調査を行う

「土師器破片(杯若干、高杯の脚一部)と須恵器破片(蓋四ヶ以上、埴二ヶ以上)」を採集

	玄 室						羨 道		備 考
	平面形	横断面形	天井頂部	長さ	奥幅	奥高	現長	玄室側幅	
1号	正方形	長円弧	尖頭	1.75	1.75	1.52			丁寧
2号	〃	〃	弧	1.9	1.6	1.14	1.5	0.85	丁寧
3号	長方形	〃	弧	3.0	1.76	1.7	1.2	1.5	丁寧
4号	〃	〃	尖頭状	2.94~3.06	1.96	1.58	0.94	1.32	荒削りノミ痕
5号	〃	〃	尖頭	3.0	1.9	1.58	1.06	1.2	丁寧ノミ痕
6号	〃	〃	尖頭	2.7	1.55	1.5		1.0	丁寧

八鳥塚谷横穴墓群一覧(単位はm)

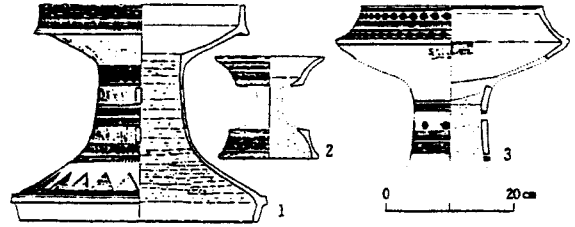
県北の古墳—東城町と西城町—

□比婆郡東城町

…広島県東北部の中国山地帯に位置するが、四周への交通は至便で古くから陰陽交通の要衝の地として、又、生活や文化の中心として栄えてきた。

○弥生時代

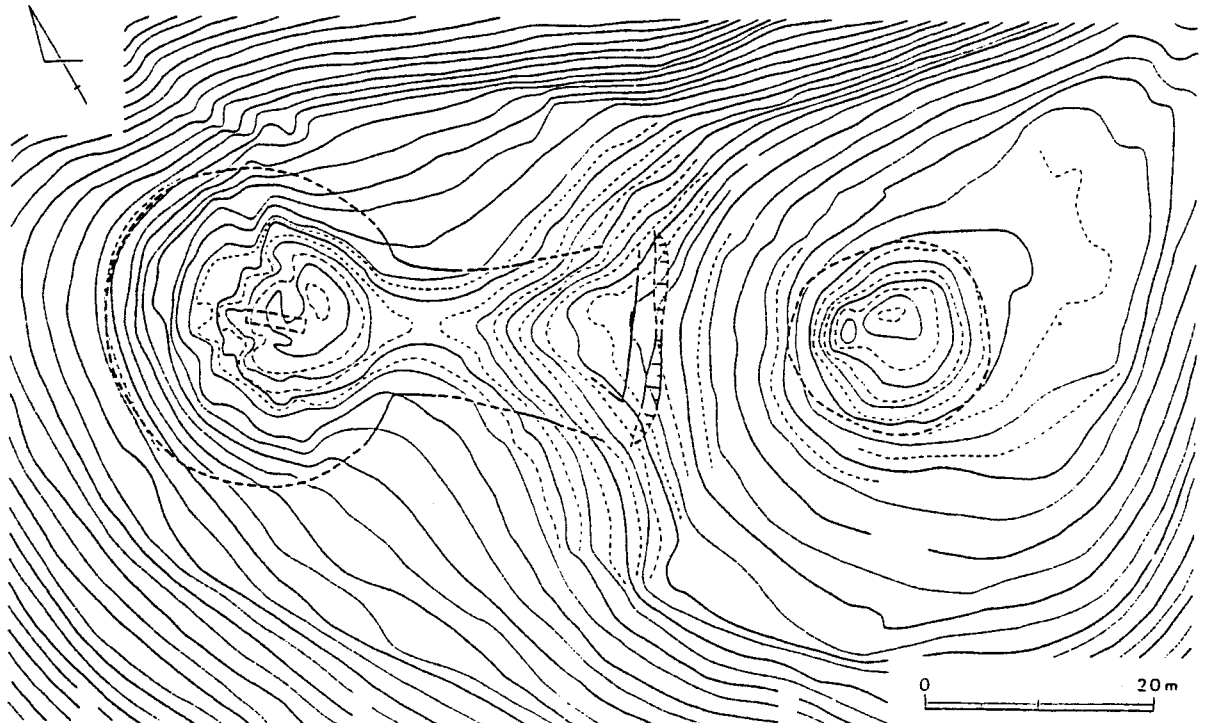
- ・戸宇大仙山遺跡…二十七基の土壌墓群  
土壌墓の周辺からは吉備を中心に共同祭祀に用いられたとされるスタンプによる連続渦文のついた脚台付鉢形土器が出土
- ・牛川遺跡…弥生後期の五基の土壌墓を検出  
中央部の四号土壌では鼓形器台  
五号土壌では上東式器台、特殊壺

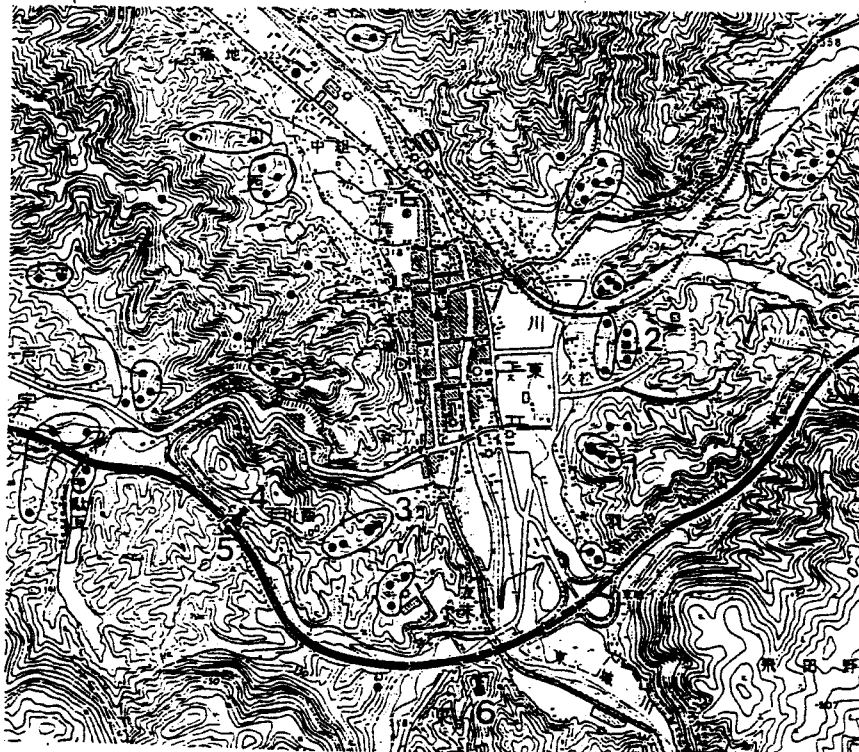


牛川遺跡(1・2)と戸宇大仙山遺跡(3)出土の土器

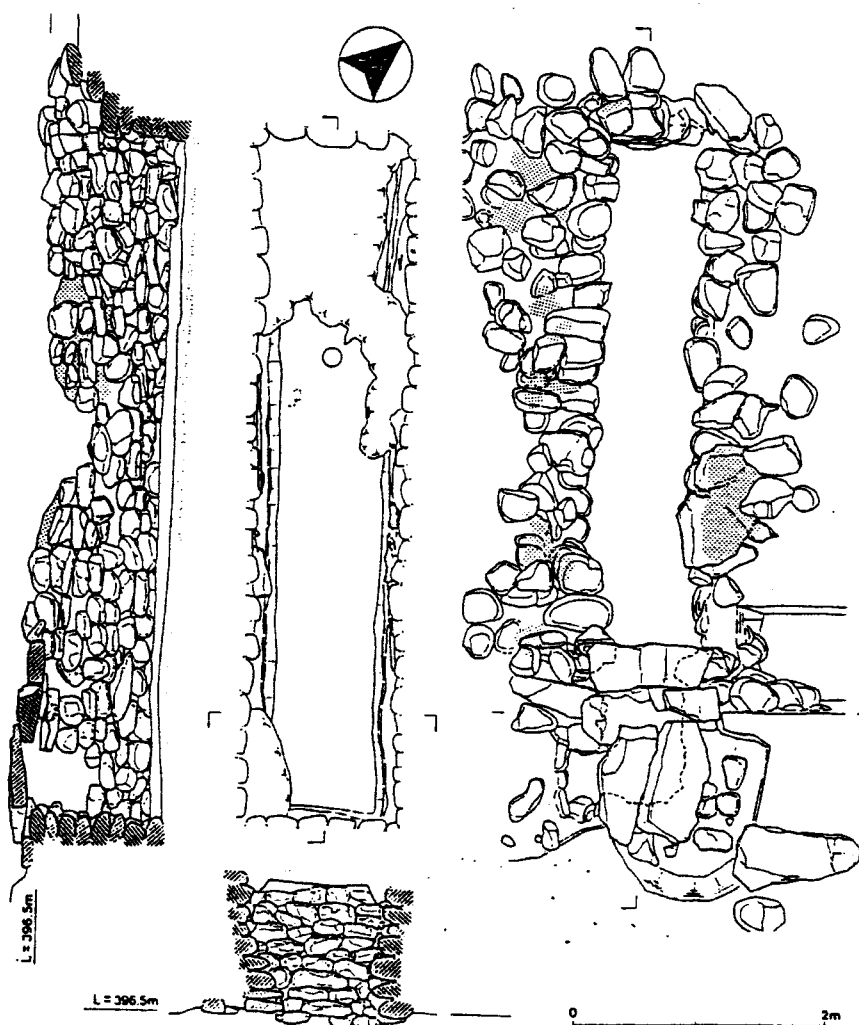
○古墳時代

- ・大迫山第一号古墳 (東城町大字川東字大迫山、後円部標高397m)  
…全長 45.5m・後円部径 25m・高さ 5m、前方部長 20m・幅 17m・高さ 2m  
後円部三段、前方部二段の前方後円墳 (主軸は北43° 西)  
外表施設—墳裾に列石、墳丘斜面に葺石  
内部構造—幅 1.18m・深さ 1.1m前後・長さ 5.14mの竪穴式石室  
床面は粘土床、石材は持ち送り構造、頭位は北西側  
遺物—棺内…銅鏡 (獸首鏡、後漢鏡、径 14.2cm)  
硬玉製勾玉 1、碧玉製管玉 7、ガラス製小玉 21  
棺外…鉄槍、筒形銅器、矢筒、銅鏃、鉄やりがんな、鉄手斧、鉄刀、鉄剣  
墳丘…土師器壺、器台、土師器埴
- ⇒⇒吉備国西北部に出現した最初の首長墓  
四世紀中葉前後





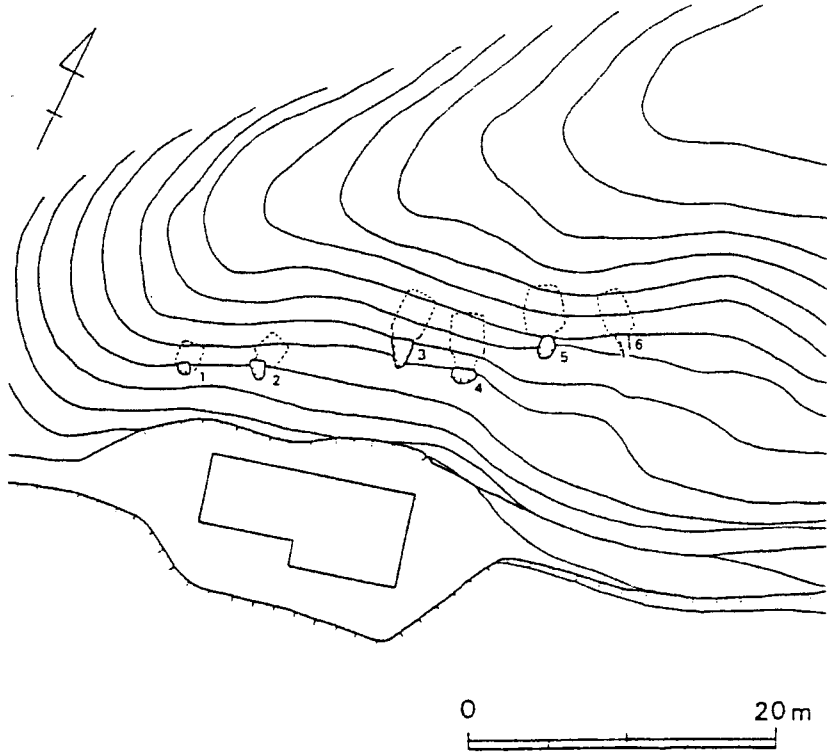
古墳の位置と周辺の遺跡 (東城 1:25000)



竪穴式石室実測図(アミ目は粘土)

四つの特徴一

- ・平面が長方形で、天井がアーチ状をなすもの（第3、4号墓）
- ・平面が長方形で、天井が尖るもの（第6号墓）
- ・平面が正方形にちかく、天井がアーチ状をなすもの（第2号墓）
- ・平面が正方形で、天井の尖るもの（第1、5号墓）



八鳥塚谷横穴群地形測量図

出土の須恵器片から六世紀の後半から七世紀初め頃  
（六世紀終末頃）の時期と推定され、個々の横穴の  
前後関係はあきらかではない

⇒「山陰との密接な関係」が示唆される

《参考文献》

- 『大迫山第1号古墳発掘調査概報』 広島県東城町教育委員会・広島大学文学部考古学研究室 1989
- 『広島県文化財調査報告』第16集 広島県教育委員会 1990
- 『芸備』第14集 芸備友の会 1984
- 『論争学説日本の考古学』5古墳時代 雄山閣 1988
- 『日本の古代遺跡』26 広島 保育社 1986
- 『古代散策』 中国新聞社 1991

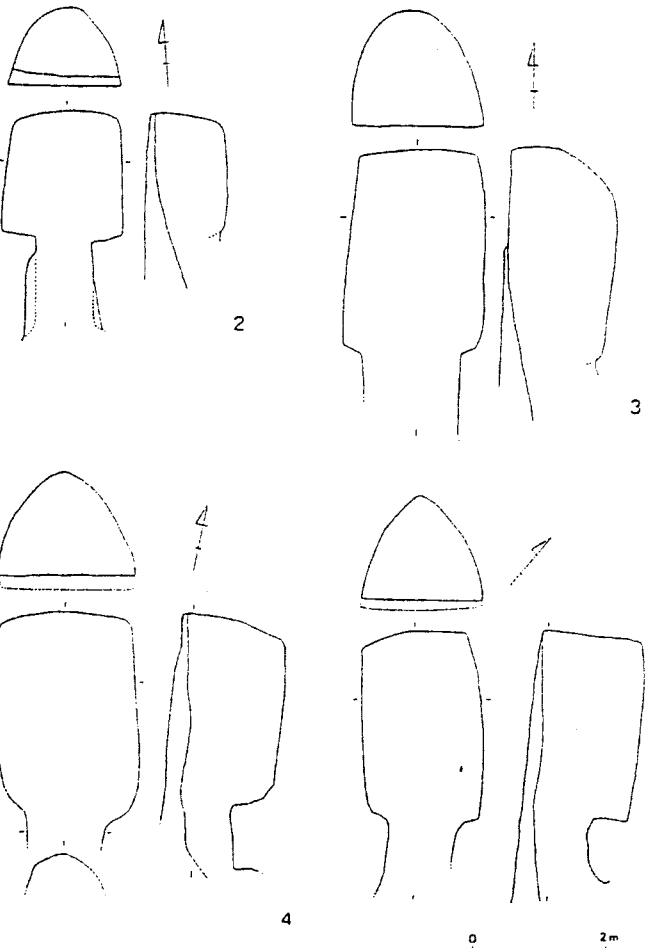


周辺の古墳分布図 (25,000分の1, 小叔可)

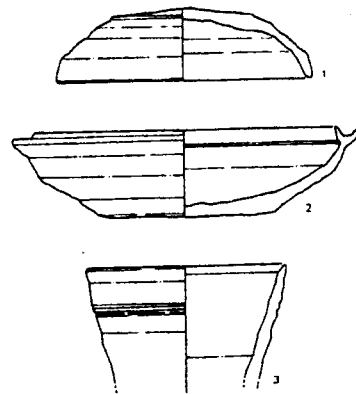
- 1. 八鳥塚谷横穴墓群    2. 内蔵迫横穴墓    3. 軒竪横穴墓群    4. 黒岩横穴墓群
- 5. 願恩寺山横穴墓群    6. 下段横穴墓    7. 勝負迫横穴墓群    8. 軒竪火塚古墳
- 9. 梶谷天神古墳

西城町の横穴墓一覧

名 称 所 在 地	玄 室				備 考
	平面形	天井形	長さm	幅m	
軒竪1号横穴墓 大字八鳥字軒竪	不整形	長円形	3.1	1.8	羨道埋没、 面加工はやや粗い
軒竪2号 大字八鳥字軒竪					全壊
黒岩1号 大字八鳥字下谷	正 方 形	長 円 形	1.9	1.9	入口狭い、面加工は粗い
黒岩2号 大字八鳥字下谷					不詳
内蔵迫 大字八鳥字内蔵迫			2.7		入口を立木がふさぐ
願恩寺山1号 大字大佐字願恩寺山	長 方 形	尖 頭 形	4.6	1.5	
願恩寺山2号 大字大佐字願恩寺山					
下段 大字大佐字下段		長 円 形	2.0以上	1.24	面加工は粗い
勝負迫1号 大字大佐字下段					玄室埋没、羨道石列残存
勝負迫2号 大字大佐字下段	長 方 形	長 円 形	3.5	1.85	
折畑 大字入江字山崎					半壊
八面 大字入江字山崎					全壊
大平ヶ丸1号 大字大塚字大平ヶ丸山	長 方 形	長 円 形	2.3	1.3	全壊、聞き取りによる
大平ヶ丸2号 大字大塚字大平ヶ丸山		屋 根 形			全壊、聞き取りによる
八鳥塚谷1号 大字八鳥字大塚	正 方 形	尖 頭 形	1.75	1.75	羨道埋没、面加工は丁寧
八鳥塚谷2号 大字八鳥字大塚	・	長 円 形	1.9	1.6	面加工は丁寧
八鳥塚谷3号 大字八鳥字大塚	長 方 形	長 円 形	3.0	1.76	面加工は丁寧
八鳥塚谷4号 大字八鳥字大塚	・	尖頭形状	2.94— 3.06	1.96	面加工は粗い、 ノミ痕明瞭
八鳥塚谷5号 大字八鳥字大塚	・	尖 頭 形	3.0	1.9	面加工は丁寧、 ノミ痕明瞭
八鳥塚谷6号 大字八鳥字大塚	・	尖 頭 形	2.7	1.55	羨道入口に石材存在



八鳥塚谷横穴群横穴墓実測図



出土須恵器実測図



# みなみ やま 南 山 古 墳

潮 見 浩

指定年月日 平成元（1989）年3月20日（広島県史跡）

所在地 甲奴郡上下町水永字南山123番，125番1，125番5の一部  
（指定地）

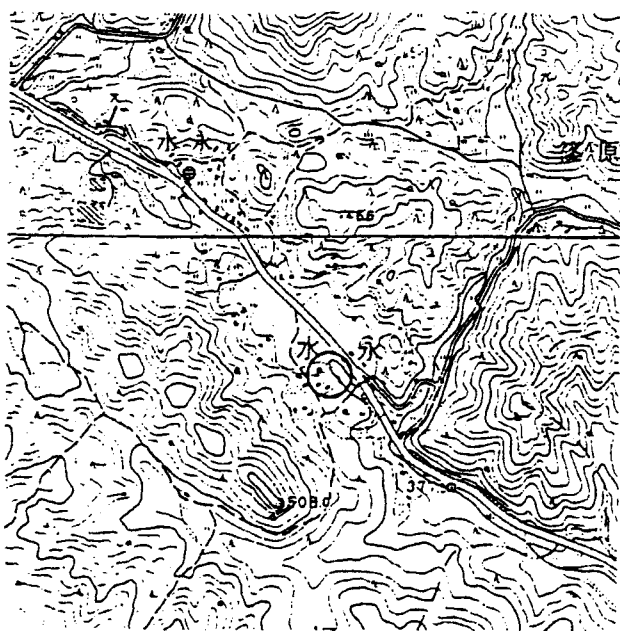
面積 約1,720㎡

所有者 岡田 郁丸（甲奴郡上下町字水永382番地の1）外1名

## 内 容

本古墳は、県道福山上下線の上下町から府中市にいたる境界あたりに位置し、小高原状の平地を東にのぞむ比高約20mの丘陵端にきずかれた帆立貝式の前円後円墳である。付近は標高400mの中国山地特有の樹木状にいりくんだ河谷平地と小台地からなり、水系としては瀬戸内海にそそぐ芦田川の最上流域のひとつになっている。

墳丘は主軸を東南から西北にむけ、丘陵の傾斜面に平行しており、東側の低平地からみると、実際よりも大きくせまってみえる。全長は約24mで、後円部の直径約16m、高さ約3～5mで、後円部の東南に長さ約8m、幅約10m、高さ約1.5mの前方部がとりついている。前方部は、長さ・高さのいずれも前円部の2分の1前後の規模であり、前方部両端の張出しもつよくない。円墳に低平な方形の造出部をもつ帆立貝式古墳といわれるものよりは本古墳の前方



第37図 南山古墳位置図  
（木野山・高蓋 1：25,000）

部はしっかりしているので、帆立貝式前円後円墳としておきたい。後円部の西北端付近には、丘陵上手をけずって周溝状の弧状をなす窪みがみとめられる。一部に周溝が存在するのであろうか。葺石・埴輪などの外表施設は、現状のところではみとめられない。

内部主体は、後円部の中央あたりから主軸にたいして直交し、東北の墳裾に入口をもうけた横穴式石室である。石室は、全長8.35mで、奥壁部の幅が最大で、入口にむかってしだいに狭くなり、羽子板状のかわった平面形をなしている。奥壁から5.6mの北側の壁面の内側

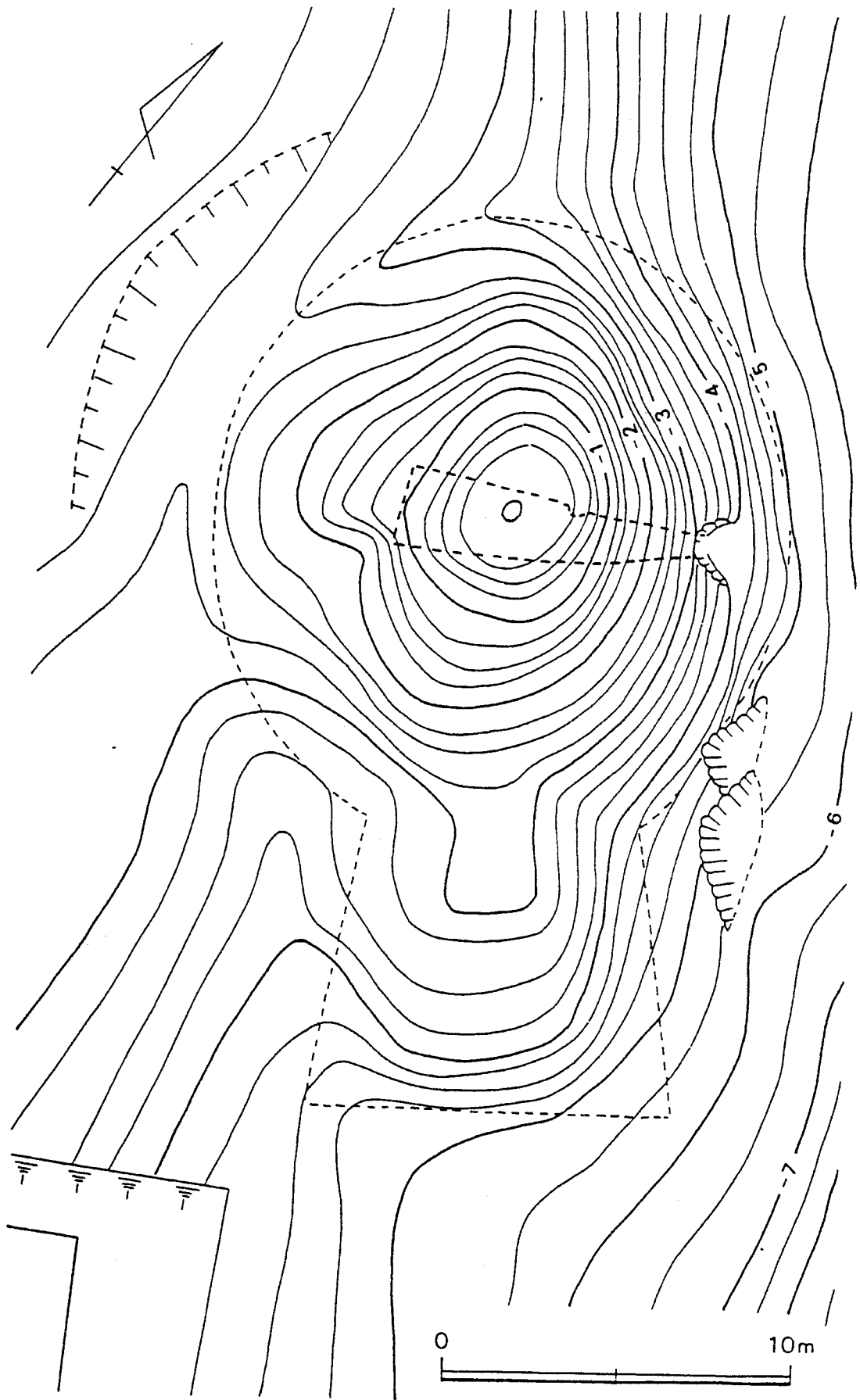
には、長さ1.45m・幅48cmの柱状の1枚の石をたてて玄室と羨道の区別をしており、片袖の横穴式石室となっている。天井石も羨道部は一段低くしつらえている。玄室は長さ5.6m、奥壁部の幅2.5m、羨道部寄りの幅1.53m、高さ2mである。床面には側壁の転落とは考えられない50cm大前後の石が散乱しており、敷石あるいは障壁様のものが存在した可能性もある。羨道部は、長さ2.75m、入口部の幅0.9m、高さ1.3mで、入口部分の狭いのが特徴といえる。石室の構築にあたっては、床面から2段目あたりまでは比較的大形の石を横長に積み、上半分には偏平な割石をまぜて横積みにし、迫持はわずかである。天井石は玄室に4枚、羨道に3枚がかけられて完存する。石材はすべて花崗岩を使用する。副葬の遺物は不明である。

本古墳の年代は、これまで出土遺物がないのでこまかな検討ができない。内部主体が横穴式石室であるところからすると、広島県では6世紀の中葉以前にはさかのほりえない。横穴式石室は柱状の石をおいて玄室と羨道の区別をしており、側壁部に一部割石などを使用しており、古い様相ともいえる。しかし、その平面形は羽子板状の特異な形態であり、この地域でこのような平面形の横穴式石室が成立したとするならば、横穴式石室のなかで古い時期に位置づけることはむづかしい。ここでは大つかみながら、6世紀後半期に推定しておきたい。

横穴式石室を内部主体とする前方後円墳は、6世紀後半になると全国的にその数が減少する傾向にある。広島県でも現段階では10数基をかぞえるにすぎない。福山市駅家町所在の二子塚古墳（県史跡）は、全長66mにおよぶ最大のものであるが、そのほかは全長20m前後で、帆立貝形をとるものが中心で、三次市・庄原市・比婆郡西城町ならびに本例のように、のちの備後北部の中国山地一帯に分布する。そのなかでも本古墳は全長24mで最も大きく、横穴式石室の規模も全長8.35m、玄室の長さ5.6mで、県内でも比較的大規模な部類である。横穴式石室の羽子板状をなす平面形は、この地域独自のもののようであり、こんご同様な形態もつ横穴式石室墳の分布範囲をあきらかにする必要がある。いずれにせよ本古墳は墳丘・内部主体ともその保存状態は良好であり、広島県の後期古墳の代表的な一つとして重要であり、県史跡としての価値がある。

## 文 献

脇坂光彦「広島県の主要古墳補遺（南山1号古墳）」『芸備』第10集 昭和55（1980）年



南山古墳墳丘測量図

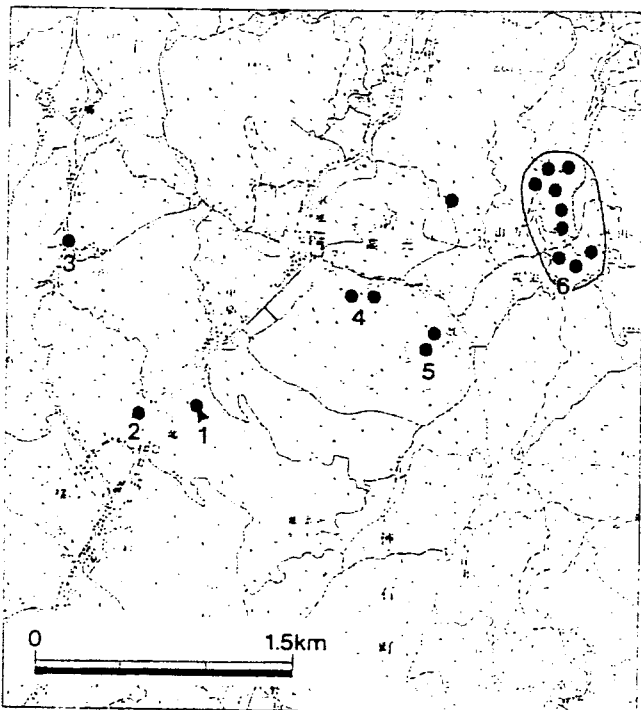
# 辰の口古墳

辰の口古墳は広島県神石郡神石町高光の雑木林中にある。神石町は広島県の東北部、中国山地の山間にあつて、集落は標高400～500mの高原地形の谷平地を縫うように点在している。高光地区は神石町のほぼ中央に位置し、隣接する福永地区と合せて、比較的人口の集中する交通の要衝である。高光地区の東には標高692mの竜王山があり、ここから高光の谷平野にいくつもの細い尾根筋が延びてきている。辰の口古墳はこれらの細尾根筋の一つの、平地に面した末端部に築かれている。古墳の標高は518.4mで、下方の平地からは30mの高さにある。

神石町は帝釈石灰岩台地の一角を占め、帝釈川流域を中心に石灰岩洞窟や岩陰がみられる。町内にはこうした自然地形を住居に利用した、全国的に著名な観音堂洞窟遺跡など先史時代遺跡があり、神石町では何千年も前の縄文時代あるいはそれ以前から、人が住み始めたようだ。稲作農業の始まる弥生時代になると、平地にも集落ができ、人口も増加したはずであるが、町内では集落跡などの遺跡はあまり発見されていない。人が住んでいなかったのではなく、かつての集落跡が現在でも住宅地や耕地として土地利用されているから

であろう。

古墳時代になると、神石町内各所に100基ほどの古墳が作られる。この地に住んだ人間の活発な生活活動がうかがい知れるが、弥生時代と同様、集落跡はほとんど明らかでない。町内に残るほとんどの古墳は直径10m前後の半球形の円墳で、内部に大石を積み上げて築いた横穴式石室をもつ。これらは古墳時代も後半期の6世紀代に属するもので、有力な農民家族の家長とその近親者が埋葬された。町内ではこれまでに古墳時代前半期の古墳や首長の墓とされる前方後円墳は全く知られていなかっただけに、今回発見された辰の口古墳の存在は実に興味深い。



辰の口古墳と周辺の古墳（福永 1:25,000 を使用）

- |           |             |
|-----------|-------------|
| 1. 辰の口古墳  | 2. 神石小学校東古墳 |
| 3. 本郷古墳   | 4. 塚原古墳群    |
| 5. 福光南古墳群 | 6. 八つ塚古墳群   |

## ま と め

辰の口古墳は古墳時代前期、4世紀後半頃（今から1620～30年前）に築造された古墳である。墳形が「しゃもじ」の形に似た前方後円墳で、しかも全長77mという、備後地方では最大の規模を誇る。前期古墳に限れば、広島県内最大となる。前方後円墳は地域の首長のみが築造を許された墓の形式で、したがって、辰の口古墳に埋葬された人物も、この地域を統率する首長であったに違いない。ただし、辰の口古墳は単なる前方後円墳ではなく、備後地方で最大の古墳である。神石町周辺という狭い領域でなく、もっと広範な地域、少なくとも備北地方全体を支配していた人物といった方が適切であろう。

辰の口古墳の墳丘をよく観察すると、限られた空間を最大限に利用して、実に効果的に築造工事がなされたことがわかる。高くて大きい後円部に、低くて長い前方部が付設されている墳丘は、横方向から見た形が特に美しい。これは、前方後円墳の古い形態を示していて、後になるほど前方部が大きく発達してくる。後円部には一人の人間を葬るには長大すぎる、全長6.7mにも及ぶ竪穴式石室を構築している。これも前期古墳の特徴の一つで、首長の権威を示すものにほかならない。さらに、墳丘には拳大から人頭大の真っ白い石灰岩をびっしりと貼りめぐらせ、葺石としている。墳丘頂部には、広島県内では他に確認されていない最古型式の埴輪が立て並べられていた。残念ながら石室内には、備北の大首長の権威、権力を示す副葬品は何も残されていなかったが、墳丘、石室の大きさ、丁寧な作り方などをみただけで、ここに葬られた首長の絶大なる力の大きさを知るに十分だ。

神石町内には前期古墳は他に確認されていないし、前方後円墳さえ他に存在していない。古墳時代の主要産業はもちろん稲作農業である。しかし、辰の口古墳を生み出す経済的基盤となるほどの肥沃な平野部はみあたらない。また、他に有力な産業があったかといえ、それも思いつかない。中国山地といえ、製鉄が思いうかぶが、現在のところ、その開始は古墳時代の後半までしかさかのぼりえない。それならば、この山間地域にこれほどの大古墳を生み出す背景は一体どこに求められるのだろうか。誰しも抱く疑問の一つである。

古墳時代は当初、西日本地方の首長達が一致して、斉一的な前方後円形の墳墓を築造することで始まった。最近では関東地方まで含まれるようであるが、近畿地方の大首長グループ（大和王権）を中心に、全国の首長間で政治的な連合体が組織され、彼ら首長達の死後、大小の差はあれ政治的記念碑、前方後円墳が作られたと考えられている。そして、近畿地方の大首長グループと地方首長との政治的力関係が古墳の大きさに反映されたと考えれば、辰の口古墳に葬られた首長の政治的実力は非常に大きいものであったといえる。

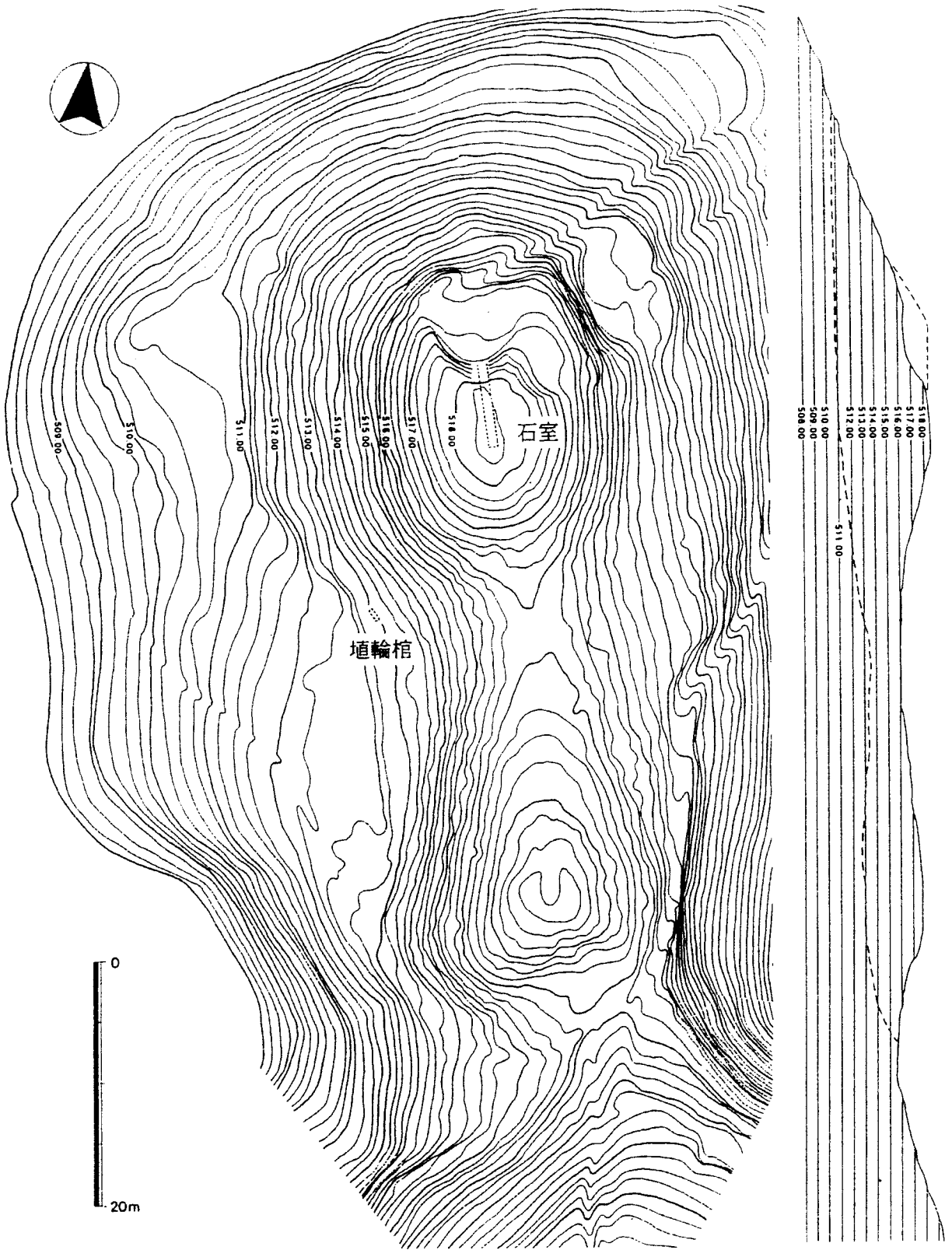
これほどに実力をもった、辰の口古墳の被葬者はどういう歴史的環境に生きた人物であったのだろうか。これは神石地域の地理的特性に関係すると考えられる。神石地域は室町時代後期には、北から南下する日本海側の領国大名の尼子氏、それを押しとどめようとする備後地方の在地領主の宮氏、その両者がせめぎあった南北間の重要な要衝であった。この地理的特性は古墳時代にも共通するものであったに違いない。

古墳時代を創設したのは、近畿地方の大首長グループ（大和王権）といくつかの他地方の有力首長グループであったが、地方勢力の中心的存在は後に吉備と総称される岡山県南部地方の大勢力や、弥生時代以来、強力な地域勢力を保持した、出雲地方を中心とする日本海地方の勢力であった。近畿地方の大首長グループ（大和王権）が、次第に地方に勢力を伸張していく過程で、前述の地方勢力はあなどりがたい存在であったといえる。

こうした地方勢力間の間隙をうめる地域には、天領や譜代大名、親藩を意図的に配置する、後の幕藩体制にみられるように、時の為政者によって特別の政治的配慮がなされたに違いない。まさに、広島県北部、特に備北地方はこうした地政学的に重要な地域であった。

このため、前方後円墳築造の許認可権をもつ近畿地方の大首長グループ（大和王権）は神石の地を中心に備北地方に勢力をもつ首長に特別の配慮を示し、大型古墳の築造権を与えるほどの優遇策を講じた。その見返りは、この重要な南北の接点となりうる地域を管理し、吉備や出雲といった南北の有力地方勢力の連合を監視、阻止することにあつた。

辰の口古墳の約10km北には大迫山第1号古墳（比婆郡東城町）がある。この古墳は辰の口古墳より1世代ほど古い時期、4世紀中頃に築造された全長45.5mの前方後円墳で、中国製獣首鏡など首長の権威を象徴する副葬品が数多く出土している。この古墳も東城盆地だけを経済基盤とするには規模、内容ともに理解しがたい。辰の口古墳とその出現背景を共通にするものと考えられる。大迫山第1号古墳、辰の口古墳の両被葬者は共に共通する政治的役割を果し、永遠の眠りにつくが、まさにその頃、4世紀後半には大和王権は全国のかなりの地域に優位な立場で勢力を拡大することに成功する。つまり、吉備や出雲の大勢力もうまく懐柔することに成功したのであろう。この後、神石、東城といった備北地方に大型前方後円墳が築造されることはなくなる。辰の口古墳出現の背景ともなった、古墳時代における、この地域の地理的特性がその役割を終えたのである。



辰の古墳の墳丘測量図



### 注意事項

集団行動です。時間を守りましょう。

家に帰るまではきちんと交通ルールを守りましょう。

それでは皆さん楽しいひとときを

疑問に感じたことは講師に聞いてみましょう。

講師の知らないことは家に帰ってから調べましょう。

自分で調べて答えが分かれば、必ず身につきますよ。